読書会レジメ

（ラッセル『結婚と性道徳』）　　2009.09.19（松下）

第１３章　今日の家族

‘家族’のみが、’性的自由を制限する合理的な基盤’を提供する。（神学的見解にはこれ以上かかわらないことにする。）

★考察すべき問題：　子供の利益のためには、どの程度まで、性関係の安定が必要か？
（安定した結婚を求める理由としての家族について考察）

・ 家族の一員であることから子供が受ける利益は、’家族に代わるもの’が何であるかにかかっている。（例：多くの家族よりも望ましいくらいの、素晴らしい孤児院）

★父親は、家庭生活において何か絶対必要な役割を演じているかどうか、についても考察する必要がある。（父親が果たす役割）

★子供の個人的な心理に及ぼす家族の影響も考察する必要がある。（国家が父親と母親の代わりをすることを、楽になるからといって、我々は望むか？）

★経済制度の影響で、どのように、父親の重要性が増減するかも、考察しなければならない。

・家族は、人間以前の制度であり、家族の生物的な根拠は、妊娠や授乳期の間の父親の助けが子供の生き残りに役立つ。（ただし、現代と文明社会と原始時代の父親の心理には違いがある。）

・家族を最高度に成熟させたのは、初期の牧畜・農業社会の経済的事情だった。（家族が増えれば労働者＝労働力が増える。／「生めよ、殖やせよ」。）

・**家族の衰退をもたらした原因**は、一部分は経済的なものであり、一部は文化的なものであった。

・・**商業**は、現代を除くあらゆる時代において、文化を生み出す主要な原因であった。商業を通して、人々は、自分たちのとは異なる慣習と接触し、その結果、’部族の偏見’から解放された。・・・。長い航海に出れば、家族の支配から解放され、家族はそれに比例して弱まった。（→「家族の支配」からの解放）

・・**奴隷制度**（主人は、奴隷の家族関係などは顧慮しない。）

・・そもそも**キリスト教**は、最初は奴隷と最下層民の宗教であり、これらの社会階層では家族がすでに弱まっていた。（キリスト教の道徳では、重要なのは、「個人の魂と神との関係」であり、「人間と他の仲間の人間との関係」ではない。／新教（プロテスタント）では、われわれは、「人間よりも神に従うべきだ」という原理に含まれている無政府的な要素が、前面に出てきた。）

＊キリスト教と仏教の違い（仏教はもともと「王侯のための宗教」）

・・**農村の人口の都市への流入**は、あらゆる時代の上り坂の文明の特徴であるが、これも家族を弱める点で、海上貿易と同様な効果があった。（日本における「出稼ぎ」の例）

Ａ．現代の家族の短所

・結婚した息子が父親の家に同居する習慣もすたれていった。（独立して生活できる経済状態）

・**工場法**は、こうした形式の搾取（例：小さな子供の過重労働）で暮らしている人々の抗議を押し切って、子供が生計の種であることを終わらせてしまった。）子供は、生計の手段であったのに、今度は経済的な負担となった。）
・**避妊の知識の普及**による、出生率の低下
・**現代の家族の地位は、その最後の砦でまでも国家の活動によって弱められてきた。**・・・。
（今日では、家族は、父親と母親とその幼い子供に縮小されてしまった。→ 核家族化）

・**幼いこどもたち**でさえ、国家の法令により、大部分の時間を学校で過ごし、そこで、両親が望んでいる事柄ではなく、国家が子供たちのためによいと考えている事柄を学習する。
（現代においては、父親が亡くなった子供は、父親が生きている子供よりも’殺される恐れ’が多い、ということはない。）
・稼いだ金に頼っている階級では、父親はまだ経済的に有用であるが、賃金労働者に関する限り、この有用性は、**社会の人道主義的な心情**のために絶えず減少している。
・**父親が現在もっとも重要なのは、中産階級である。**というのは、父親が生きていて、十分な収入を得ている限り、子供たちに金のかかる教育を受けさせることができるし、そういう教育を受けている限り、子供たちは、自分の代になっても、社会的・経済的な地位を維持することができるが、これに反して、子供がまだ小さいときに父親が死んだ場合、子供の社会的地位が低下する恐れが十分ある。ただし、この不安定な状態は、**生命保険の慣習**によって大いに減少している。
・**父親の多忙による子供との疎遠（週末にやってくるおじさん）**
・子供が**思春期**に達すると、両親と子供の間に、衝突が非常に起こりやすくなる。子供は、もう自分のことは自分でできると思っているのに、親のほうは親らしい気遣いで、しかも、それは「権力愛の偽装」であることが多い。

B．（まだ残っている）家族の長所
・家族は、親としての情念を’ふた親’に与える。
（子供のある男女は、通例、主に子供に関して自分の生活を調整する。）
（「財産欲」は、親としての感情と密接に結びついている。）
（**父と子供との間の誤解**：息子のほうは、父親の死んだときの財産よりも、むしろ現在の５ポンド紙幣と小さな親切のほうがよほどありがたいと思う。・・・。息子は、すべての習慣が形成されてしまった中年の父親（例：勤勉で節約家）を見ている。（もとはといえば、子供のためにそのような習慣を形成しても、子供には惰性で夜遅くまで働いていると思っている。）
・幼い子供の立場から見れば、両親が重要な理由は、自分の兄弟姉妹を除いて、他の誰にも与えられない愛情を両親から受け取る、ということである。
・家族の伝統の影響（家系の伝統の影響）

★父親が（社会的に）完全に除去された場合（例：国家が父親の役割をすべて担う制度の導入）、男性の心理と行動に及ぼす影響（金持ちを除く）
・自分の死後のことに関心を持つことが少なくなる。
・男性の歴史への関心も、歴史的伝統の連続という意識も減るだろう。
→　**従って、家父長制度は、いつまでも重要さを失わないでいるかは疑問だとしても、依然として重要である。**

第１４章　個人心理の中の家族

個人の性格が、家族関係によってどのように影響されるか、３つの側面から考察する。

１．家族関係が子供に及ぼす影響

★幼い子供が家族のほかの成員にいだく情緒（フロイトの考え）

・男の子は、父親を性的ライバルとして憎む／男の子は、母親をエロティックな対象としてみる／両親を独占したいので、兄弟姉妹を憎む

→　私は、最近数年間、小さい子供たちを相当扱ってきた経験から、フロイト学説には以前考えていたより多くの真理があると思うが、フロイト学説は真理の一面のみを述べたものであり、しかもその一面は、ふた親の側に多少良識があれば、たやすく、きわめて瑣末な問題になると考える。

1)**エディプス・コンプレックス**（母親を確保しようと強い感情を抱き、父親に対して強い対抗心を抱く心理状態）

・**母親**が、性的に満ち足りていれば、**成人からのみ求めるべき種類の情緒的な満足**を、わが子に求めようとしないだろう。→それゆえ、幸福な女性は、不幸な女性よりも、よい母親になる見込がある。（不幸なときには、ある程度の「自制」が必要だろうが。）

・**幼い子供の異性愛的な情緒**は、**他の子供と交わることで、自然で健康な、無邪気なはけ口を見出すことができる**。→３，４歳を過ぎると、家庭を子供の唯一の環境とすべきではなく、一日の相当な時間を、同じ年頃の子供といっしょに過ごさせるべきである。

・新たに弟や妹が生まれたときには、他の子供が、自分は両親にとって前よりも大切でなくなった、と思い込むことがないように努力する必要がある。（→『ラッセル教育論』）

・**性**を、**自分たちをこの世にあらしめた両親の間の関係**として学ぶならば、姓を最も良いかたちで理解することになる（性教育のあり方）。→　現状では、友達から猥談として学ぶ。

２．家族関係が母親に及ぼす影響

★家族生活が全体として望ましいかどうか決めるためには、家族生活に代わる、唯一現実的な道はなんであるか、考察しなければならない。（例：母権制家族、孤児院のような公共施設との比較）

ａ．母権制家族

想定されること

子供は、片親しかしらないようになる。女性は、子供がほしいと思えば生むだろうが、父親が子供に特別な関心を寄せることは期待しないし、また、必ずしも、それぞれの子供に同じ父親を選ぼうともしない。

→　このような制度において、経済的な準備が万全の場合、子供はこういう制度でひどく苦しむだろうか？　また、そもそも、父親の子供に対する心理的な効用は何であろうか？

もしも、国家が妊娠中や授乳中の母親と幼児の面倒を十分に見るなら、そういった期間に「男性による保護を望む感情」は、大いに弱められるだろう。

父親の子供に対する重要な効用

〇性を結婚愛と生殖に結びつける点

・幼児期の数年が過ぎると、「女性的な人生観」とともに、「男性的な人生観」に触れることには、明確な利益がある。（子供を父親ばかりではなく、母親からも引き離そうというプラトンの提案には、あまりとりえがないと思われる。）

〇家庭に父親の座をなくすことで女性がこうむる被害

・男性との親密で真剣なつきあいが減ること。（人間は、両性が互いに相手から多くのことを学ぶように作られているが、単なる性関係は、たとえ情熱的なものであっても、こういう学習には不十分であろう。）

・子供を養育するという重大な仕事で協力し、それに伴い長年にわたって親密に交わってきたことは、男性が子供に対してまったく責任を持たない場合に生じるいかなる関係よりも、一段と重要で豊かな関係をもたらす。

３．家族関係が父親に及ぼす影響

・現代の多くの知的な男性は、「父性」をほとんど失っている。しかし、最も文明化社会でさえも、大部分の男性はまだ父性を感じている。

・**子供をほしがる気持ち**は、男性よりも女性のほうに普通にあるという説があるが、自分の印象では、真偽のほどはともかく、正反対である。（女性は、子供を産むためには、陣痛と苦痛を我慢し、美しさをうしなわなければならない。／男性が子供をほしがる気持ちがどれだけ強いかは、専門職についている男性が、わざわざ物質的な慰安を犠牲にしてまでも、その階級に必要とされる高価な方法で子供を教育しようとすることを考えてみれば、明らかである。）

・男性が**子供の数**を制限したいと思うのは、普通、経済的な理由からである。

★男性は、現在父性から与えられる権利を享受できなくなるとしても、子供を作るだろうか？

・責任をもたなくてもよくなれば、むやみに子供を作るだろうか？　→　子供をほしがる男性は、それに伴う義務もほしがっている。

・もしも、法律が改正され、慣習がかわり、「**子供は母親だけのもの**である」という見方になじむようになったら、女性は今日知られているような結婚に類したものは、おしなべて自分たちの独立を侵害するものであり、結婚しなければ享受できるはずの、子供に対する完全な所有権をむざむざ失うことになる、と感じることだろう。

→　男性の女性に対する関係のまじめさを著しく減少させ、その関係を、心と精神と肉体との親密な結合ではなく、ますます単なる快楽の問題にしてしまうだろう。

若干のためらいをもって言うならば、私の信念はこうである。

認められた社会的関係としての「父性」が奪われたとしたら、男性の情緒的生活はつまらなく、薄っぺらいものになりがちであり、ついには、じわじわと退屈と絶望が募っていき、その中で生殖は衰えていくだろう。